

<探鳥>のすめ

野鳥は空に花は野に、自然のままに愛しましょう
—20年間、少年少女を通じての野鳥保護運動につくしてきた医師、宮城県志津川愛鳥会を主宰する田中完一さんは、おだやかな口調で語ります。
「自然と野鳥の保護をはかるには、学問や法律によるものよりも、子供たちの良識を目覚めさせることがいちばん近道で、当を得ていると考えまし
てね。野に咲く花にはほえみ、森にうたう小鳥に耳を傾け、虫の営みに驚きこらす……ひとつひとつの生命の尊さを認めること、故郷の自然に対し
て謙譲の気持を培うことこそ、探鳥会を通じて子供たちに教えられれば、と思っています」

探鳥会。自然の中にあるがままの野鳥の姿を、
そこねたり驚かしたりしないで、観察したり楽し
んだりする集いです。高尚な趣味、として片づけ
る前に、現在の日本では、探鳥会での自然への接し
方の中に、大きな社会的意義が秘められているこ
とを、あらためて考えみたいと思います。

いままでの日本では、自然への接し方といえば
まず「採集」から始まり、学校の教育でも昆虫採集
や植物採集が、自然認識の第一歩として課せられ
てきました。自然是どこにもあり、誰のものでも
ない、それを誰が手にしようと勝手で、早いもの勝
ちだという考え方。美しいものとみれば手にとる、
逃げれば追う、抵抗すれば殺す、死ねば捨てると
いった無分別の行動が、いかに誤った自然観を助長
し、節度のないムキ出しの欲望となって、かけがえの
ない天然資源をいかに荒廃に導いてきたことか——。

ヒトはトリ何をすべきか

いま、日本の自然は、産業社会の高度化と、急速
な経済成長とともに次々と開発され、保護や管理
が省りられないまま、容易に回復できないとこ
ろまできました。自然環境の破壊——す
みかの環境がこわされるとすぐにいなくなってしま
うトリたちは、みずから命を犠牲にして、人類に重大な「警鐘」を鳴らしているのです。

こう考えてみると、探鳥会のように、美しく可憐
な野鳥に接して、捕えるでもなし、ハク製にするで
もなしといった自然への親しみ方は、その根底に
きびしい自然へのモルタルが確立されていなければ
なりませんが、これこそ「自然の保護と賢明な利用」
の第一歩であり、探鳥会の方方が、単なる自然
趣味の問題ではすまされない、大きな社会性を含
んでいると、私たちは考えます。

野鳥のように自然のしきみの中にあるて、重要な
生態的役割を果たしているものは、なによりも
ヒト共有の尊い財産であり、これをあり繋ぎ、あい
携えて次代へのこしていくことが、いまの私たち
に課せられた義務であると考えるのであります。



財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー
株式会社がシリーズとして制作するものです。



愛鳥の心が育てるよい環境④
(日本鳥類保護連盟募集第一席入選愛鳥標誌)